

英国軍艦勇者列伝 3

Legend of British Fighting Ships 3

岡部いさく Written by Isaku OKABE



英国軍艦勇者列伝3

Written by Isamu OKABE

Legend of British Fighting Ships 3

岡部いさく



◆18世紀の風刺画家トーマス・ローランドソン描く海軍士官候補生(部分模写)

ブルータス「おおよそ人のなすことには潮時というものがある、一度その差し潮に

乗じさえすれば幸運の渚に達しようが、乗りそこなつたら最後、この

世の船旅は災難つづき、浅瀬に突きこんだまま一生うごきとれぬ。」

—— シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』Ⅳ幕3場（福田恆存訳）

「荒涼たる海原に罌粟の花が揺れることはなく、整然と並ぶ十字架もない、

そこに若き心が眠る……波の下に……澁刺とした者、善良な者、勇敢な者、

しかし星々は変わることなく夜を徹して見守る、水底深く横たわる者たちを」

—— アイリーン・マホニー『深き水底に』より抜粋（拙訳）

「さあ来い、その意気だ、者どもよ、

栄光へと我らは舵を取る」—— イギリス海軍行進曲『ハート・オブ・オーク』より抜粋（拙訳）

序

岡部さんは知識だけでなく、
魅力もいっしょに教えてくれる人—— 笹原大

軍事評論家といえはお硬い感じで難しいことばかりお話される人というイメージですが、岡部いさくさんは実際に会ってお話するとフレンドリーで優しい方なんです。僕は最初は岡部さんは軍艦というより飛行機に詳しい方という認識でいました。『月刊モデルグラフィックス』は以前から読んでおり、岡部さんはまず『世界の駄っ作機』の方だという印象が強かったんです。ミリタリーに詳しい人とお話することはあるんですが、そういう方の知識ってたいいてい専門のジャンルが決まっています。「戦車だけ」「飛行機だけ」「現用兵器だけ」とか細分化されていると思うんです。しかし岡部さんの場合は飛行機も軍艦も、第一次大戦のものも詳しいし、現用のものも詳しいというのがすごくなって常々思っていました。一度静岡ホビーショーで『世界の駄っ作機』シリーズの単行本の発売記念サイン会でサインしていただいたのはいい思い出です。

岡部さんが書かれているものの印象ですがよくこんなマニアックなネタを探してこられるな、博識な方だなと思いつつも記事を読ませていただいています。親しみやすい調子の文章もそうなんですが、僕はなんと言

つてもイラストが好きなんです。巷にあふれる最近のイラストはCGが多いですよ。CGイラストも最初に見たときは「すごいな」って思ったりもしたんですが、最近は見慣れてしまったせいか手書きのイラストのほうが味があつていいなつて思うようになりました。岡部さんのペン画のイラストは柔らかいタッチで、しかもそのメカの特徴を誇張して描かれているので、よく知らない兵器でも「あ、これはこういうものなんだな」って一目で理解することができんです。これは描かれている岡部さんが兵器の本質的な部分まで見抜かれていてその特徴を抽出して描かれているからなんですよね。周りにそえられている手書きの文字も優しく語りかけてくれるように親しみやすいです。著書にサインをいただいたときには「なにかイラストを描きまじょうか」と聞いていたいて「先生におまかせします」って伝えたら「そういうのがいちばん困るんですよ」っておっしゃりながらサラサラつと可愛い飛行機のイラストを描いていただきました。あとで知ったんですが描いていたのはフェアリー・ガネットというイギリスの艦上対潜哨戒機でこういうマイナーな飛行機のチョイスも岡部さんらしいなと感じました。

取り上げる題材が王道ではないもの、零戦とか大和とかタイガー戦車ではなく、メジャーなものではないけど、実はこんなにおもしろいんだよっていうものを取り上げてくださるのもいいですね。『ネイビーヤード』の連載記事「なんだか蛇の目のフネだから」で取り上げられる艦船も戦艦や空母といった主力艦は少なく、駆逐艦とかフリゲートとか潜水艦とかあまり日の当たらない艦が多いような気がします。このあたりの英国の軍艦はそんなにプラモデルのキットが多いわけじゃないから、勉強になります。マニアックなようで英国の軍艦ファンって意外に多いんですよ。

僕自身は太平洋戦争中の日本海軍の軍艦の模型を中心に製作しています。ただ日本海軍の軍艦のルーツは英国

海軍の軍艦にあると思っています。戦艦だと金剛型はご存知のとおり英国で設計してもらったものですし、長門型以前の戦艦は大なり小なりイギリス海軍の戦艦の影響を受けていますよね。最後の大和型戦艦だって塔型の艦橋はネルソン級やキング・ジョージV世級の影響を受けているんじゃないかなと思っています。今のところ自分の制作計画にはないんですが、もし英国海軍の軍艦を作るならばプリンス・オブ・ウェールズとか日本海軍にゆかりのある戦艦にチャンレジしてみたいですね。迷彩塗装は難しそうですが。あとは空母。アークロイヤルとかイラストリアスとかもおもしろいかな。宮崎駿監督の『雑草ノート』（大日本絵画刊）に英国海軍の空母が出てくるお話があったじゃないですか。架空の特設空母安松丸が英国の装甲空母に魚雷を命中させるお話。僕は以前、安松丸を作ったことがありますので、そのときの敵役としてイラストリアスは作ってみたいと思っていました。飛行甲板に複葉雷撃機のソードフィッシュがずらりと並ぶなんて絵になるといいませんか？

僕が英国海軍の軍艦の模型を実際に作るとしたらポンポン砲なんかを作り込んだりしたいです。日本海軍では対空火器として25mm機銃なんかが搭載されています。僕は25mm機銃については組み立てるのは大変でもエッチングパーツのものを搭載するようにしています。それがいちばん実艦のイメージに近いと思うから。25mm機銃はすでに技法や使うパーツは確立されているのだけど、ポンポン砲とかは新たなチャレンジになりますね。今なら3Dプリントパーツで出来のいいものがあるかな。他の機銃は米国海軍のものと同じもののケースが多いですよ。そこらはエッチングパーツがあるのでそれを利用すると思います。あとは英国海軍の特徴を模型で表現するとしたら色についても勉強したいですね。大西洋の英国海軍ってちよつとくすんだ青とか灰色とかが使われているイメージが強いです。落ち着いた色合いですね、日本海軍の塗装とは全然違います。これがかつこよく見せるにはどうしたらいいのか、こだわって試してみたいですね。もちろん艦上機の精密ディテールアップもやって

みたいです。複葉機だと張線とかの情報量が多いので並べるとかっこいいと思っています。そういった軍艦の装備や迷彩についても岡部さんには教えてほしいです。

『ネイビーヤード』の連載ではこれからも僕の知らない英国海軍の軍艦を紹介してほしいです。誰もが知っている有名な軍艦ばかりではなく「こんな魅力があるんだよ」というお話を聞きたいです。そういう知識が模型という趣味をより豊かにしてくれると思うんですね。

笹原大 ● ささはら だい

1969年生。千葉県出身。中学生までガンブラをメインに楽しんでたが、高校入学と共に製作活動を休止する。サラリーマンを約20年経過後、転動のない現在の仕事に就いたため、家族の了解もあり模型製作を再開。現在、艦船模型専門誌『ネイビーヤード』をメインに1/700スケールの日本海軍艦艇製作に特化した模型ライフを楽しんでいる。二児の父親。ブログ名R&R工廠の由来は子供の名前のイニシャルから命名。著書として『笹原大の艦船模型』ナノ・テクノロジー工廠、『笹原大の艦船模型』ナノ・テクノロジー工廠2、『R工廠 超巧造艦ワークス 笹原大1/700艦船模型集』（いずれも大日本絵画刊）がある。

目次



C O N T E N T S

序……………岡部さんは知識だけでなく、魅力もいっしょに教えてくれる人……………笹原大……………3

BFs001	強くもなく、速くもなく……………	条約型巡洋艦……………	9
BFs002	始まりのA……………	A級駆逐艦(前編)……………	21
BFs003	戦いに斃れ、戦い続け……………	A級駆逐艦(後編)……………	31
BFs004	最初の超弩級……………	オライオン級戦艦……………	41
BFs005	北岬、ノルマンディ、ペナン沖……………	S級駆逐艦……………	53
BFs006	長く数奇な戦歴……………	G級駆逐艦……………	65
BFs007	巨砲の軽巡……………	カレイジャス級大型軽巡洋艦……………	77
BFs008	2度沈んだ潜水艦……………	T級潜水艦(前編)……………	89
BFs009	球磨と足柄を沈める……………	T級潜水艦(後編)……………	101

BFS010	タイフーンの攻撃	ハルシオン級掃海スループ	113
BFS011	CはカナダのC	C級駆逐艦	125
BFS012	「建造しなおい」て戦いへ	戦艦クイーンエリザベス(前編)	135
BFS013	マイアーレの勇者たち	戦艦クイーンエリザベス(中編)	145
BFS014	いつも他の場所にいた	戦艦クイーンエリザベス(後編)	155
BFS015	英国初だけど英米混血	原潜トレッドノート	165
BFS016	ナルヴィック殴り込み	H級駆逐艦(前編)	175
BFS017	Uボートとの死闘	H級駆逐艦(後編)	187
BFS018	すでに趨勢は決して	カースル級コルウェット	199
BFS019	ポークとパイン	P級駆逐艦	209
BFS020	時代遅れのビッグキャットたち	タイプ41フリゲイト	221
BFS021	ウォッチャー・オブ・ザ・スカイズ	タイプ61フリゲイト	233



強 く も な く 、
速 く も な く

条約型巡洋艦

"County" class cruisers

1928年～1959年

基準排水量：1万0570トン

満載排水量：1万4200トン

全長：192.0m

幅（J/Lジ含む）：20.8m

喫水：5.3m

機関：ボイラー 8基、ギアードタービン8万0000shp、4軸

速力：31.5ノット

航続距離：10ノットで8000カイリ

兵装：8インチ連装砲×4基

4インチ連装高角砲×4基

2ポンド8連装対空機関砲（ボンボン砲）×4基

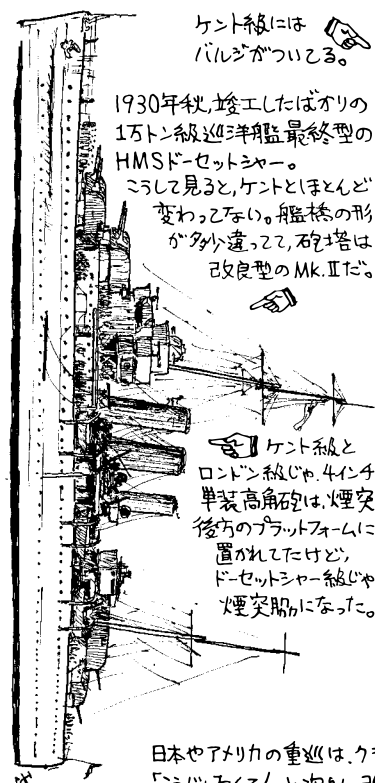
12.7mm 4連装機関銃×8基

航空機：1機

乗員：685名

（データはケントの改装後）

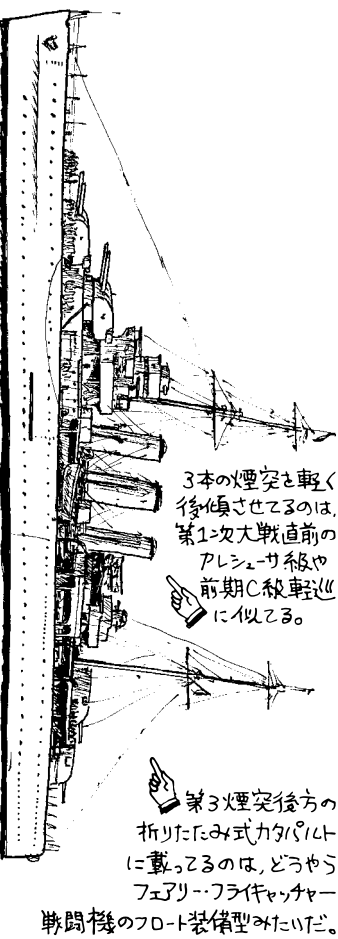
イギリス海軍の1万トン級巡洋艦第1陣
 ケント級のネームシップ、HMSケント。
 1931年の写。乾舷の高い平甲板。
 日本やアメリカの重巡は船体重量を
 軽くしようと、甲板を波打にしたり。
 ロングフォクスル型にしたけど、イギリス海軍
 は航洋性を確保するため
 こういふ船体にした。



ケント級には
 バルジがついてる。

1930年秋、竣工したばかりの
 1万トン級巡洋艦最終型の
 HMSドーセットシャー。
 こうして見ると、ケントとほとんど
 変わってない。艦橋の形
 が多少違って、砲塔は
 改良型のMK.IIだ。

ケント級と
 ロンドン級じゃ、4インチ
 単装高角砲は、煙突
 後方のプラットフォームに
 置かれてたけど、
 ドーセットシャー級じゃ
 煙突間になった。



3本の煙突を軽く
 後傾させてるのは、
 第1次大戦直前の
 アレクサンドリア級や
 前期C級軽巡
 に似てる。

第3煙突後方の
 折りたたみ式カタパルト
 に載ってるのは、どうやら
 フェアリー・フライキャッチャー
 戦闘機のフロート装備型みたいだ。

日本やアメリカの重巡は、クラスごとにいろいろ違って、「いや、もっと!」、
 「こうじゃなくて!」と次々に改良されていったのに比べて、イギリスの
 「Aタイプ」巡洋艦は、大きさも兵装も配置も3クラスともほぼ同じ。「カウンティ級
 第1・第2・第3グループ」と言い方をしないのはなぜなんでしょう。寸法を比べると、
 ケント級は全長192.0m×幅20.9mで、ロンドン級とドーセットシャー級は寸法が同じで、
 全長192.8m×幅20.1mとケント級よりちょっと細長い。

軍縮条約と列強海軍巡洋艦事情

第2次世界大戦を戦った各国の重巡洋艦って、そのほとんどは1922年のワシントン条約の制限の下で作られた艦で、つまりは基準排水量1万トン、主砲口径8インチ（約20cm）とかの条件のなかで、いろんなところを妥協してる。結局望む性能と装備は1万トン以下じゃムリそう、と考えた海軍はこっそり1万トンの制限を破ったりしたんだけど、なかには律儀に制限を守った海軍もあった。

イギリス海軍はもちろん律儀な方で、そもそも1万トンの排水量制限も、主砲8インチっていうワシントン条約の制限も、実はイギリス海軍が第1次大戦中の1915年に計画した、当時としては大型の巡洋艦ホーキンス級が基になっていた。ホーキンス級は排水量が約9800トンで、主砲は7・5インチ（19cm）単装砲が5門、29・5ノットという速力だった。

イギリス海軍としては、条約後の世界の巡洋艦の大きさとしては「このぐらいが上限でいいんじゃないの？」と言いつつ、せっかく作ったホーキンス級を条約で廃艦にされたくはなかった、という気持ちもあったのだった。こうして各国が巡洋艦の大きさと火力の条件に合意しても、じゃあその巡洋艦でどうするかは各国いろいろ考えがあった。イギリス海軍としては、なにしろ大英帝国の植民地が世界中にあって、それを結ぶ海上通商路を守らなくちゃならないから、巡洋艦は航路の保護や艦隊戦のときの警戒が主な任務となる。

その点、アメリカ海軍や日本海軍は、巡洋艦は太平洋での艦隊決戦のときの戦艦部隊の補佐役にするつもり

だったし、とくに日本海軍は主力艦の数をアメリカとイギリスに比べて少なく制限されたから、その劣勢を補うためにも巡洋艦は重武装にしたくて、結局条約型巡洋艦第2陣の「妙高」型じゃ排水量を超過しちゃう。アメリカ海軍も砲力を重視して、第1陣のペンサコラ級は8インチ主砲の連装×2基と3連装×2基の10門装備にしたけど、それとともに条約の制限を真面目に守り過ぎて、ペンサコラ級はトップヘビーで動揺の大きいヘンなフネになっちゃった。イタリア海軍はどうせ地中海で行動するだけなんだけど、なにしろイタリア半島の西と東で艦隊を素早く動かさなくちゃならなくて、その巡洋艦は速力重視で排水量は制限を超過していた。イタリアにつられてフランスも速力重視の巡洋艦を作ったのだった。

イギリス海軍の1万トン級重巡カウンティ級

その点、イギリス海軍の条約型巡洋艦第1陣のケント級は、基準排水量1万トンで、実質はわずかに余裕を残して9942トン、主砲は8インチ連装砲塔×4基の計8門、4連装魚雷発射管×2基、4インチ単装高角砲×4門、4連装ポンポン砲×2基、索敵や哨戒のための航空機を1機搭載、速力は31・5ノットというものだった。基準排水量の制限があつて、そのなかで然るべき砲を装備して、速力もそれなりに出さなくちゃならないと、当然装甲防御は犠牲にしなくちゃならなくて、前後の主砲弾庫部分と中央部の4インチ高角砲の弾庫部分には一応の防御が施されたけど、それ以外の防御はごく薄かった。それでも飛行機からの爆弾に対する防御

も考えられていた。あとケント級では中央部の水線下にバルジが設けられた。ボイラーは8基4群で、中央の2群の煙突を1本にまとめたから、煙突は3本だ。それが同じ角度で後傾してところは、イギリスの軍艦らしい几帳面な設計だな。機関出力は8万馬力で、推進器は4軸だ。航続距離は12ノットで1万3300カイリ。これで1万トン以下に収めるために、やっぱり構造重量をいろいろ削って、甲板の木材も重いチーク材をやめて、もっと軽いモミ材を使ったりもした。

こうしてみるとケント級巡洋艦は、砲力では日本の「妙高」「高雄」型やアメリカのペンサコラ級の10門、あるいはアメリカのその後の巡洋艦の3連装×3基の9門に劣るし、イタリアのトレント級やフランスのデュケーヌ級、日本の「古鷹」型や「妙高」型の34〜35ノットには及ばない。防御はイタリアとフランスが極端に薄弱で、日本とアメリカ、イギリスはそれよりはましだったけど、まああんまり強固なもんじゃなかった。それを考えるとイギリスのケント級には他国の条約型巡洋艦より勝ってる部分がないように見える。

でもイギリス海軍にとっちゃ、ケント級はホーキンス級よりも火力は大きく増えてるし、速力だって速くて、その点では充分に作る意味のある巡洋艦だったのだ。それにイギリス海軍は巡洋艦は外洋で長期間の哨戒に働いてもらう艦と考えてたから、ケント級では荒い波でも航行できるように乾舷を高くして、艦首にはナツクルをつけた。当然艦内容積も大きいから、居住区画も広く取れる。実際にケント級巡洋艦ができてみると、航洋性が優れていて、海が荒れてても甲板は波をかぶりにくく、動揺も少なかった。1928年に南米に長期航海に出たコーンウォールの艦長は、航海中に荒天に遭遇したけど最大傾斜は18度だったと書いてるくらいだ。同

じ条約型巡洋艦でも、アメリカのペンサコラ級ソルトレーク・シティなんか、中程度の波でも傾斜が40度にもなって、しかも動揺周期が10秒と短かったんだそう。ケント級はそんなわけで乗員にも評判が良くて、暑い海域での居住性も良好だった。

とはいえケント級にも難点はあって、艦尾の方で振動が出やすいともいわれて、これはまあ後に補強してなんとかなった。乾舷が高いのも善し悪しで、魚雷発射管が甲板上にあったから、魚雷が海面に落ちるときの衝撃が大きくて、魚雷が壊れるという問題もあった。これは魚雷を強化して、落下角度を緩くすることでもなんとかした。また新設計の主砲、8インチ50口径砲Mk. VIIIとそのMk. I連装砲塔がやっぱり思ってたほど扱いやすくて、1門あたりの発射速度は要求の毎分12発には遠く及ばず、がんばって毎分5発、持続的には毎分3〜4発が精いっぱいだった。それとイギリス海軍は伝統的に露天艦橋だったんで、艦橋が吹きさらしで寒いというのは、まあ仕方なかったかもしれないな。

イギリス海軍はワシントン条約の締結当時、他の国の海軍よりも優位に立つために、それに長い海上通商路を守るために、70隻の巡洋艦が必要と考えて、そのうち17隻を1万トン級の巡洋艦にしようと思った。本当は軍備予算も限られてる（だからワシントン条約で戦艦の建造を制限しようと思ったわけだし）なかで、大型で建造費の高い巡洋艦を何隻作るべきなのは難しい問題だったんだけど、1922年に日本が条約型巡洋艦8隻の建造構想を示して、アメリカもそれに対応しようとしたんで、イギリスもそれなりの数を建造しなくちゃならなくなった。

そこで1924年度計画で5隻+オーストラリア海軍向けに2隻を建造することにしたのが、条約型巡洋艦第1陣のケント級だった。ペリック、サフォーク、コーンウォール、カンバーランド、ケントの順に1924年9月〜11月に起工して、1925年3月と5月にオーストラリアとキャンベラが起工、竣工は1928年1月〜7月にカンバーランド、ペリック、オーストラリア、コーンウォール、サフォーク、ケント、キャンベラの順だった。どっちにしてもケントが1番艦じゃないんだけど、海軍省が計画時に「ケント級」と命名しちゃうんだからしょうがない。

でも1924年になるとイギリスじゃ労働党政権になって軍備予算はさらに削減されて、17隻の建造は無理っぽくなってきた。1925年度計画では、前年より1隻減って4隻が建造された。これがロンドン級で、バルジを止めて、防御を見直し、B砲塔が発射したときの爆風の影響を減らすために艦橋をちよつと後ろに下げたりして、全長もわずかに長くなった。ロンドン級は1926〜1927年に起工されて、1929年1月〜9月に、ロンドン、デヴォンシャー、シュロップシャー、サセックスの順に竣工した。

翌1926年には、予算の制約で1万トン級は2隻のみが建造された。砲塔が改良型のMk. IIになって、防御が多少強化されて、カタパルト位置がちよつと前になって、4インチ高角砲の位置も前進したぐらいで、ほとんどロンドン級と同じだった。これがドーセットシャー級で、1927年に起工されて、1930年に竣工したけど、起工も竣工も2番艦ノーフォークの方が先だった。

このようにイギリスの条約型巡洋艦は、ケント級7隻〜ロンドン級4隻〜ドーセットシャー級2隻の13隻が

1930年までに揃った。どれもイギリスの州「カウンティ」の名前がつくから、総じてカウンティ級ともいうし、どれもほぼ同じような艦だから、みんなまとめて「ケント級」といったりもする。

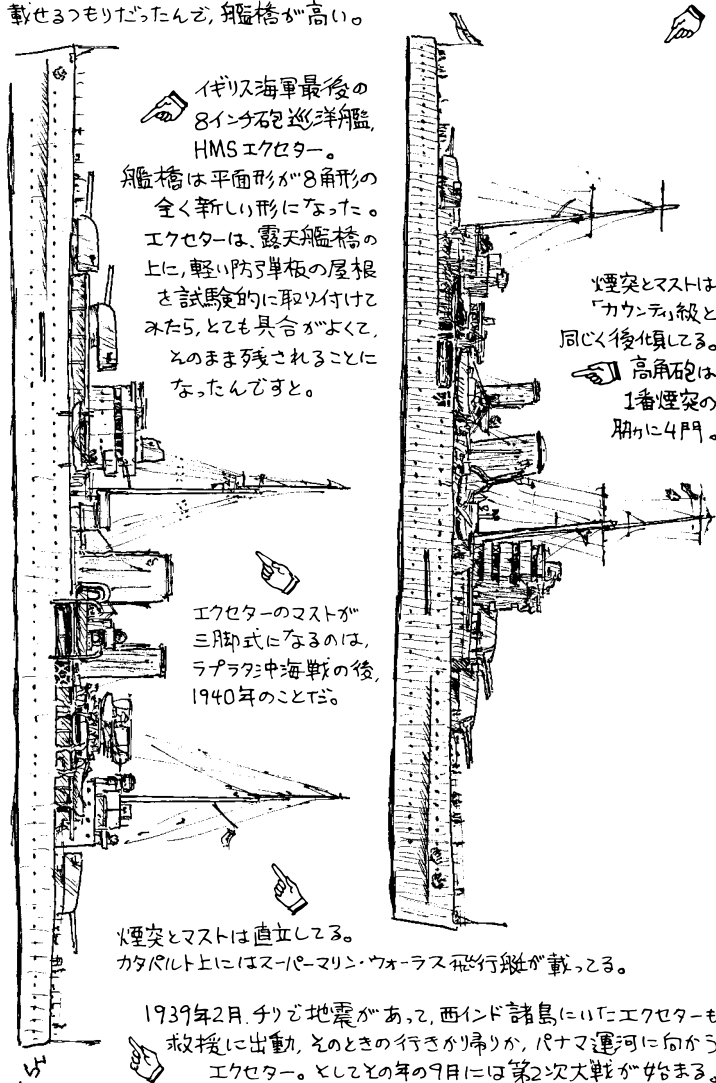
同じ条約型巡洋艦でも、日本やアメリカはクラスごとに大きく改良されていたけど、イギリス海軍はほぼケント級と同じような艦を建造してる。ケント級で納得がいったのか、あるいは予算の制約で、あんまり大幅な改設計をして費用がかかるのが望ましくなかったのか。

それでもイギリス海軍は、日本の「妙高」型が20cm砲連装5基の10門を装備するのを知って、1927年には連装砲塔5基、前部3基と後部2基の案と、前後に2基ずつ中央部に1基の案を検討したことがあって、煙突は2本にまとめるつもりだったけど、やっぱり防御や艦内スペースの点で無理だということになった。結局やっぱり連装砲塔4基で、防御を強化、重量軽減のために艦尾甲板を一段下げた設計で、1929年計画で2隻、予定艦名サリーとノーサンバーランドを建造するつもりになったけど、1930年に予算の制約で中止になった。

節約型重巡「Bタイプ」

それほど厳しい予算の下、なんとか巡洋艦の数を揃えようと、イギリス海軍は1926年計画では、ドーセツトシャー級と8インチ連装砲塔を3基の6門にして小型化した「Bタイプ」巡洋艦1隻を発注した。これに

「Bタイプ」巡洋艦 HMSヨーク。1933年7月の姿。竣工当時、フォクスル部分の側面は船橋下まじしかにあがってなかったんだけど、このころには改修されて1番煙突の下ぐらいまじりあがった。ヨークは軽量カタパルトをB砲塔の上に載せるつもりだったんで、船橋が高い。



対して大きいカウンティ級は「Aタイプ」と呼ばれることになった。

これがヨークで、計画段階では、船体が短いのでカタパルトはB砲塔の上に載せるつもりで、それでも前方視界を確保するために艦橋も背が高くなった。だけど考えてみたら装甲の薄い砲塔じゃカタパルトの重さが支えられないんで、やっぱり艦の中央部にカタパルトを置くことにした。そこで艦橋は次のエクセターみたいな形にしようとも考えられたけど、建造が進んで改設計は間に合わなかった。ヨークは1927年に起工されて、1930年に竣工した。

同じく「Bタイプ」巡洋艦が1928年計画でもう1隻建造された。ヨークの反省から設計は改められて、とくに艦橋は張り出しや露天部があると、それだけ気流が乱れて不都合が多いため、思い切って八角形の単純な箱型にされ、煙突も直立型になった。これがエクセターで、この艦橋の形はすぐ後のリアンダー級軽巡にも採り入れられることとなった。

エクセターは1928年に起工、1931年に竣工して、イギリス海軍最後の8インチ砲巡洋艦になった。このあとイギリス海軍は6インチ砲の軽巡の建造を進め、さらには8インチ砲8門よりも、発射速度も弾数も投射重量も大きくなるとして、6インチ3連装砲塔4基12門のサザンプトン級（タウン級）巡洋艦を建造する。エクセター以後、イギリス海軍が8インチ砲の巡洋艦を建造することも、計画することもなかったのだ。エクセターは巡洋艦としては、ワシントン条約と予算の制約の下で決して強力でも高速でもなかったけど、フネとしてなかなか上出来で、動揺も振動も少なかったそうだ。

「Aタイプ」巡洋艦の艦名は州・カウンティの名前だったけど、「Bタイプ巡洋艦」のヨークもエクセターも都市名で、「シテイ」級と呼ばれることがある。またどちらも大きな聖堂のある都市なので、「カシードラル（聖堂）」級なんていう呼び方をされることもある。

これらイギリス海軍の条約型巡洋艦、13隻の「Aタイプ」と2隻の「Bタイプ」が第2次世界大戦でどう戦ったかは、またのお楽しみ、ということ。



終戦後の戦い

1945年8月15日に日本が連合国に降伏し、第2次世界大戦が終わった。大戦でイギリス海軍は英連邦も含めて主要艦艇431隻を失い、イギリス海軍の戦死者は5万1500人にのぼった。これだけの犠牲を払ってイギリス海軍は勝利を得たのだが、手に入れた平和は長く続かなかった。ソ連を中心とする共産主義諸国と、アメリカ、イギリスなど自由主義諸国との間の対立は、すぐに新しい緊張を作り出すこととなった。

1946年5月15日、バルカン半島の共産主義国アルバニアの南端と、その西側のギリシャ領ケルキラ島の間の狭いコルフ海峡を航行していたイギリス海軍の巡洋艦オライオンとシュバープは突然アルバニアの陸上砲台からの砲撃を受けた。砲弾は両艦には命中せず、死傷者もなかったが、イギリスはアルバニアに抗議し、謝罪を求めたが、アルバニア政府はイギリス艦が領海に侵入したと非難した。

それから5ヵ月後の1946年10月22日、イギリス海軍は国際法上の「無害通航権」を行使することを目的に、巡洋艦モーリスヤスとリアンダー、駆逐艦ソーマレズとヴォレージにコルフ海峡を航行させた。コルフ海峡には機雷はないはずだったが、実はその2日前にアルバニアの要請でユーゴスラビア海軍の敷設艦が機雷を敷設していた。その機雷にソーマレズが触れ、ソーマレズは火災を起こし航行不能となった。そのソーマレズを後続のヴォレージが曳航してケルキラ島に向かおうとしたが、

今度はヴォレージも触雷、艦首を失ってしまった。これで両艦合わせて43名が死亡し、どちらの艦も沈没は免れたものの、ソーマレズは修理しても引き合わないとして除籍されてしまった。

第2次世界大戦ではシャルホルストと戦い、羽黒と戦ったソーマレズはこうして軍艦としての生涯を終えたのだった。ソーマレズとその同型艦S級駆逐艦については本書のFile No.5

を参照してください。

この後の1946年11月に、イギリス海軍はアルバニア政府の合意なしにコルフ海峡のアルバニア領海を掃海、機雷を持ち帰った。その機雷を証拠にイギリス政府は12月にアルバニア政府の砲撃と機雷敷設を非難、賠償を求めたが、アルバニア政府は機雷は第3国が敷設したものでアルバニアはあずかり知らぬことと拒否した。イギリスは国際司法裁判所に提訴して、イギリスの言い分が認められ、アルバニアはおおよそ200万ドルの賠償を命じられたが、アルバニア政府はこれを無視した。結局賠償金が支払われたのは、イギリスとアルバニアが1991年に国交を結んで、1992年にコルフ海峡事件で和解した後のこととなった。

こうしてイギリス海軍は第2次世界大戦終結の翌年には早くもコルフ海峡で新しい戦いを経験した。共産主義陣営と自由主義陣営の対立は大規模な戦争に至らない冷たい戦争、冷戦と呼ばれることとなったが、両陣営が直接向き合う現場では、実際に軍艦が傷つき兵が死ぬ戦いでもあったのだ。さらに1949年には中国の国民党政府と共産党の人民解放軍の戦いに巻き込まれて、スループ艦アメジストが揚子江で人民解放軍の砲撃で損傷、死者を出したうえ、アメジストと乗員が拘留されるという事件があった。アメジストはその後、夜陰に乗り、客船に似せた灯火を点して脱出に成功している。

1946年10月、コルフ海峡で
ソーマレズはこれで
全損となった。



ソーマレズを曳航しようとして
ヴォレージも触雷、艦首を失った。
これは後進むマルタに
入港するところ。





9784499234351



1920076034008

ISBN978-4-499-23435-1

C0076 ¥3400E

定価[本体 **3,400** 円 + 税]



The background of the cover is a detailed illustration of a British battlecruiser, likely a Queen Elizabeth-class ship, sailing on a blue sea with white-capped waves. The ship is shown from a side-on perspective, moving towards the right. It features a complex superstructure with multiple gun turrets, a large crane, and a prominent mast flying the Union Jack flag. The hull is painted in a dark grey or black color, with a lighter grey upper section. The overall style is that of a classic Japanese anime or manga illustration.

英国軍艦勇者列伝 3

Legend of British Fighting Ships 3

Written by Isaku OKABE

大日本絵画

Published by Dainippon Kaiga